

## モンパ族の犁農耕と農具に関する見聞記： 2007年9月14～18日インド国アルナチャールプラデシュ州 West Kameng、Tawang 県

安藤和雄

京都大学東南アジア研究所

### はじめに—問題設定—

チベット語系の Monpa 族とチベット族は古くから高所に住む

ヒマラヤ東部、ブータンに接するインドのアルナチャールプラデシュ州の Tawang 県、West Kameng 県には、Monpa 族が住んでいる（図1）<sup>1)</sup>。Monpa 族はチベットに暮らすチベット族と同じく、チベット語系のモンパ語を話し、チベット仏教を信仰し、チベット文化圏をつくっている。アルナチャールプラデシュ州の多くの少数民族にあって、Monpa の人々は、一段と高所に住み、古くからチベット仏教やチベット文字という「文明」に参加し、それを育んできた。

2005年の2月に、アルナチャールプラデシュ州の Lower Subansiri 県にある Apatani 族の村を訪れるようになって以来、標高3000m近くの Tawang の街や、Monpa 族の素晴らしさを耳にするようになった。Monpa 族の農具や、暮らしぶりを見てみたいと思ってきた。直接的な契機は、同年9月に、10日間ほどかけてラサ周辺のチベット族の村を訪れ、犁、まぐわなどの農具と農業に関する調査を行った経験であった。ヒマラヤを挟んで、同じく高所に暮らすとはいえ、ヒマラヤ東部の南面と北面では自然環境は大きく異なる。南面は雨が多く、V字谷の山の斜面にへばりつくように集落がつくられているが、北面のチベットでは、ブラマプトラ川の支流がつくる氾濫原や比較的なだらかな山の斜面を利用して集落が立地し、作物栽培が営まれている。

田畑<sup>2)</sup>に従えば、Monpa 族は、中国チベット自治区において、メンパ（門巴）族とよばれ、2000年現在8923人が住んでいる。チベット自治区南部の門隅（Monyul）地区が故地である。200年前に門隅地区から林芝（Nyigchi）地区の墨脱（Medog）県に移動し、現在、墨脱県に約5000人、門隅地区（現行の行政区分の山南地区）の錯那

e-mail: ando@cseas.kyoto-u.ac.jp

（Cuona）県に約600人が居住している。Monpa の圧倒的多数は、ヒマラヤの南面のアルナチャールプラデシュとブータンに暮らしている。「メンパ族の創世神話伝説『猴子変人』とチベット族の『神猴祖先』は同系列のものであるとされ、大昔の先住民は血縁関係があると考えられている」<sup>3)</sup>と指摘され、Monpa 族とチベット族が古には共通の祖先であったことをうかがわせる。チベット族の起源については、大量の石器時代の遺物の出土から、チベット（青蔵）高原で、5000年以上も以前から人間の生活が営まれていたことが証明されている<sup>4)</sup>。いつの時代に Monpa 族がヒマラヤの南面に住み始めたのかは定かではないが、紀元前を射程にいれることができるほど、相当に古いことは容易に推測できる。ヒマラヤの高山を挟み、言語的に、恐らくは文化的にも祖先を同じくするチベット族と Monpa 族の人々は、高所を移動し定住を志向し、在地の世界をつくることで、高所の自然環境に適応するための農業技術を発展させてきた。高地文明研究プロジェクトに参加するにあたり、ヒマラヤの南と北というまったく異なる高所環境で、祖先を同じくし、また、近い文化をもつチベット族と Monpa 族が長い歴史の中でそれぞれに発展させてきた在地の世界を、農業技術の展開を通じて理解するとともに、異なる環境下でそれぞれに在地の世界をもつことの重要性を学びたいという強い動機にかられた。

### 環境問題を考えるキー・ワード：「在地」と「とどまる」

人間はなぜ与えられた自然環境に定住し、暮らし、社会を持続させようとする在地の世界をもとうとしてきたのか？この問は多分に哲学的であり、実証的な答えを求めることはできないかもしれない。しかし、今日の環境問題を克服していくためには、在地というキー・ワードから、私たち

個々の人生や暮らし、社会を捉えなおし、一人一人が環境と自分との関係の「哲学的根拠」をもつ必要がある、と私は強く意識している。環境問題は、暮らしの中での便利さの追求問題と、都市と農村との問題に通底している。この点から「哲学的根拠」をもつためのもう一つのキー・ワードは「とどまる」であることが透けて見えてくる。一度立ち止まることで便利さを振り返る意義、環境にとどまり暮らしと社会を持続する意義が再び問われているのである。

言語的にも宗教的にも近いチベット族と Monpa 族が、ヒマラヤを挟み南北に分かれ、定住し、異なる自然環境のもと農業や暮らしを發展させ、それぞれの在地の世界をつくってきた。日本人は、私を含め、戦後の経済發展万能時代に、在地に「とどまる」ことの原点意識を置き忘れてしまっているのではないだろうか。ヒマラヤの高所の人々の暮らしや社会に実体的に学ぶことの意義がここにある。

### 犁と農具の調査空白地帯：木製犁先と無床犁の Monpa 族の犁

上記の問題意識に加え、近年、バングラデシュやインドのアッサム州、ミャンマーのラカイン州では、犁へらをもたない犁先であるインド型の犁から、耕起時に土の反転が十分に行える犁へらをもつ犁先へと、犁の形態変化が起きている。この技術変化は農民の自主的なものであり、Monpa 族が犁をもっていれば是非この点も確認してみたかったのである。実は、Monpa 族が犁をもっているかどうかさえ私はしっかりとした情報をもっていなかった。それほど、アルナチャールプラデシュの Monpa 族の農業に関してはアクセスできる情報が少ない。例えば、アジアをフィールドワークし、文献を網羅しているアジアの犁研究の第一人者である応地<sup>2)</sup>にも言及されていない地域である。もっとも 1987 年から 20 年間が経過しているので、その後、応地によって調査されている可能性は否定できないが、Monpa 族の村を訪れ、彼らが使っている農具を自分の目で確かめてみた、2007 年 8 月と 9 月に Tawang 県と West Kameng 県の Monpa 族の村を合計で 10 日間ほどかけて急ぎ足で調査した(図 1)。本稿は、その時のフィールドノートを記録としてまとめたものである。帰

国後、Monpa 族がつかっている農具に関する文献をあたってみたが、今のところ、図や写真などの具体的な資料を確認できていない。農具調査の空白地帯である。短期間の時間に追われながら通訳を介して行った調査で、私の思い間違いが少なくないことだろう。それらは、今後、調査を継続することで修正していきたい。大切なことは、今後の調査を深めていくため、特に高地文明プロジェクトに参加する研究者の皆さんが Monpa 族の農業を理解するたき台となる基礎資料の整理にあると考え、見聞記として本稿をまとめた(最終稿脱稿後 2008 年 2 月に補足調査を同じ地区ですることができたので、その成果も本稿に反映させた)。

農具の名称などは、通訳の Pasang さんが英語表記してくれたものと私自身に聞こえた音をカタカナで併記した。記述の順序は、ほぼフィールド



Based upon Survey of India map with the permission of the Surveyor General of India. © Government of India Copyright, 1996.

図 1 Tawang、Dirang の位置 (Government of Arunachal Pradesh [1996] : xii ページより)

ノートの順序にしたがった。私の興味と、それに答えてくれた村人との話題の展開をなぞった。多少煩雑な記述となったが、得られた情報の文脈が読者にも理解されやすいと考えたからである。

Monpa 族は、イネ、シコクビエ、トウモロコシ、オオムギ、コムギ、ソバを、水田、常畑、焼畑で主食として栽培し、水田や常畑では犁やまぐわを使用してきた。今回の調査で特筆できる事実は、私が訪れた Monpa 族の村では、犁先が今でも木製であり、鉄ではないことと、犁床、犁柱のない無床犁が使われていることであった(犁の各部の名称については図2を参照)。また、トウモロコシとイネを水稲として栽培している一部の Monpa 族の人々は、トウモロコシ飯とでも呼べるトウモロコシの粒と白米のまざった糧飯(かてめし)を主食として利用してきた。私が調査した中国雲南省紅河県甲寅郷のチベット=ビルマ語族であり棚田文化で有名なハニ族に通じるトウモロコシとイネの糧飯文化である(甲寅郷のハニ族は高収量品種の栽培が導入されるまではさかんにトウモロコシの粒と白米のまぜご飯を食べていた)。Monpa 族の木製犁先をもった無床犁と農具は、私が同様な調査を行っている東南アジア諸国、中国、インド中央・東部、ネパール、アッサム、バングラデシュ、チベットの犁や農具と比較検討されるべきである。しかし限られた時間の中では、本稿で行うことはできなかった。この課題については、後日、取り組みたい。上記地域での私の調査経験から少なくとも指摘できることは、Monpa 族の木製犁先の無床犁は、他のどの地域でも見ることができなかった。1958年にブータンを調査した中尾佐助の著書<sup>3)</sup>の写真ページに、犁とまぐわの写真が掲載されている。「スキは全部木製だが細工はりっぱ、スキは牛の2頭曳きで耕す<中略>板ハロー麦をまいた後でかける」と中尾佐助は、写真とともに説明している。写真から判断するかぎり、本文で報告するように、Tawang や Dirang で用いられている無床犁とはことなり、彎轆犁の長床犁であり、梯子状のまぐわには言及されていない。応地<sup>2)</sup>の論文の中に示された「インド亜大陸における犁の分布」を示している図では、ブータン西部に、彎轆犁の長床犁のマークが記されている。ブータンを調査し、Tawang で Monpa の犁を見ている放送大学の河合明宣さんによれば

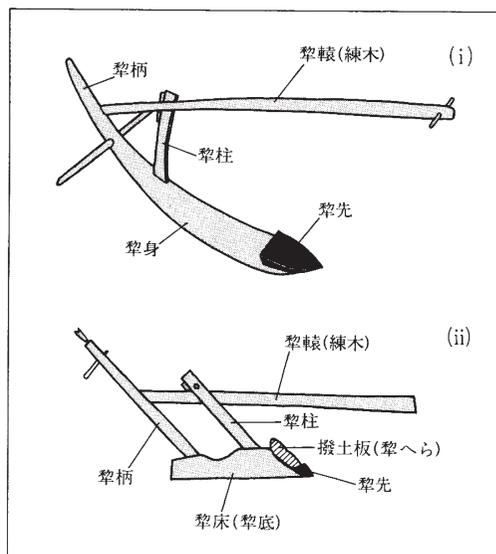


図2 犁の主要部材の名称(応地[1987]の図「63 犁の主要部材とその名称—わが国在来犁の場合—」から転用)

Tawang で観察した犁がブータンで使われているという。Fürer-Haidendorf<sup>4)</sup>は、Monpa 族は、鉄の犁先を二つの鉄のリングで犁(Plough)につけた大きくて重い犁を使用している、と記している。Fürer-Haidendorf の記録の間違えか、当時と現在で状況が変わったのか。私は今回の調査では鉄の犁先を確認することはできなかった。今後の調査の課題とした。

### Monpa 族について

Monpa とは、Mon = 低い土地、Pa = 人の二つの単語からなり、低い地域に住む人という意味である<sup>5)</sup>。Monpa 族は、住んでいる地域で、Dirang Monpa、Kalaktang Monpa、Tawang Monpa の3つのグループ分けがなされている。この3つのグループ以外にも小さなグループがあり、それぞれ地名に Pa (人) がつけられて呼ばれる。通訳の Pasang さんは Dirang Monpa に属している。Pasang さんの話では、Dirang Monpa、Kalaktang Monpa はブータンの Monpa と言葉が通じるが、Tawang Monpa とは言葉は通じないという。Tawang Monpa はチベットのラサの方面のチベット族が移動してきた歴史をもち、チベット族と言

葉が通じると概説してくれた。河合明宣さんの指摘は、Monpa 族の分布からもなっとくがいく。プータンと Tawang や West Kameng は、ヒマラヤ東部として、農業的にはかなり強い類似性があるのかもしれない。この点についても今後の課題としたい。

### 調査地域の自然条件と民族概要

調査結果の報告に入る前に、調査地域の作物栽培と気温、降雨量などの自然条件についてアルナチャールプラデシュの県地誌<sup>6)</sup>と West Kameng の統計書<sup>7)</sup>から、調査地域の自然条件と作物統計の概要を紹介しておく。二つの調査村である Sangti と Lish が属している West Kameng 県の県庁所在地である Bomdila の街（標高 2430m ~ 2700m）の 1997 年 ~ 2005 年の 9 年間の平均年間降雨量は、1634mm、2000 年 ~ 2005 年の 6 年間の最高気温と日最低気温の平均は、21℃と 0.7℃であった。表 1 には、2005 年の月別降雨量と月最高気温と月最低気温が示されている。明瞭な雨季（5 月 ~ 10 月）と乾季（11 月 ~ 4 月）、夏と冬が明瞭な季節をもつ気候である。表 2 には、Tawang 県、West Kameng 県の主な作物栽培面積の 1984/85 年 ~ 90/91 年の変化を示してある。古いデータであるが 1985/86 年の耕地の灌漑率は、Tawang 県で 12%、West Kameng 県 3%で、主に稲を灌漑栽培している。観察では、Tawang 県は West Kameng 県よりも高所の占める割合が多くなる。Tawang 県ではコムギ、West Kameng 県ではトウモロコシ

がもっとも栽培面積の多い作物となっている。民族構成については 1971 年のセンサスに記されている。1980 年以前は Tawang 県、West Kameng 県、East Kameng 県の 3 県は Kameng 県を構成していた<sup>8)</sup>ので、ここでは民族別のセンサス情報が記載されている Kameng 県の 1971 年センサスの状況を紹介しておきたい（以降のセンサスは現在のところ入手できていない）。1971 年センサスには、Monpa 族を含めて主要な 7 つの民族が住んでいる（表 3）。1971 年のセンサスの記述では<sup>8)</sup>Monpa, Sherdukpen は、焼畑と常畑・水田を行っているが、他の民族は主に焼畑であることが記されている。

### 調査結果

2007 年 9 月 14 日（金）晴れ、一時小雨、West Kameng 県（District）、Dirang 郡（Circle）、Sangti（シャンティ）村での調査

午前の調査：9:00 頃に、Dirang（ディラング）の街のゲストハウスを出発し、街から 11km を Sangti（シャンティ）川沿いを谷についた舗装道路沿いに車を走らせて 9:27 に壟を使って事前情報を得ていた Sangti 村に到着した。道路沿いに立てられている家の周辺にはトウモロコシ畑が広がり、一段と低い川沿いに出穂前後の稲が育つ水田が広がっている。今は、トウモロコシの収穫とトウモロコシを保存するために木組みのはぎにかけるのに農家は忙しいそうである（写真 1）。道路沿いの一軒の農家に入った。自宅の前のトウモロコシ畑での収穫作業に忙しい合間を縫っ

表 1 Bomdila（標高 2430m ~ 2700m）での降雨量と気温（2005 年）

月	降水量(mm)	月最高気温(°C)	月最低気温(°C)
1	27	10	1
2	25	11	3
3	29	15	6
4	62	18	8
5	169	18	9
6	157	22	13
7	252	23	15
8	205	24	15
9	204	23	13
10	320	19	10
11	20	15	7
12	3	14	3

出所) Govt. of West Kameng District (2006:98, 99ページ)

表2 Tawang 県、West Kameng 県の 1984/85 年～ 1990/91 年の主要作物の栽培面積 (ha) の変化

	稲	トウモロコシ	雑穀(主にシコクビエ)	小麦	豆類	油糧種子類
1984/85						
Tawang	1429	518	6.08	2818	3.2	235
West Kameng	1526	3485	1110	261	224	305
1985/86						
Tawang	1466	532	618	2812	400	300
West Kameng	1607	3540	1365	262	350	350
1986/87						
Tawang	2655	4220	n.a.	4575	764	194
West Kameng	6050	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.
1987/88						
Tawang	1635	790	800	2950	40	n.a.
West Kameng	1060	3650	1750	1815	160	n.a.
1988/89						
Tawang	794	604	843	1115	240	194
West Kameng	1020	3860	1412	1797	553	283
1989/90						
Tawang	850	750	870	1500	260	236
West Kameng	1000	4300	1420	320	613	310
1990/91						
Tawang	855	756	872	1536	268	239
West Kameng	1040	4307	1425	892	620	315

出所) Govnt.of Arunachal Pradesh (1996:137)の表からTawang県とWest Kameng県を抜粋。  
注)n.a.は統計値の記述なし。

表3 1971年センサスの民族別人口統計

民族名	人口(人)
Bangni (Nishi)	28468
Monpa	27812
Miji (Dammai)	3549
Aka	2333
Sherdukpen	1635
Sulung(Puroik)	2770
Bugun(Khowas)	703

出所) Govnt.of Arunachal Pradesh (1996)63-65ページ

て、Pomaさん37歳から犁を見せてもらい、農具や作物栽培の話、暮らしぶりなどを以下のように聞いた。Pomaさんは4～5年前から百姓仕事をしている。話を聞いた農家の地点（以下、本調査ではGPSのサミットを用いて地理的位置を確認した）は、標高1556m、N27° 23.798'、E92° 16.501'であった。Pomaさんは、聴き取り中も時々トウモロコシの収穫に家の前の畑にでて、仕事の合間に戻ってきてもらって、話しを続けて聞いた。

犁:犁先をTongpa(トンパ)といい木製であり(写真2)、犁先には畑用と水田用がある。犁の材料は、

Chung Shing (チュク シング、チュクの木)。写真の犁先は2年以上使っている。犁身はLangliy(ラングリー)、練木はShingtsa(シングツォ:シンは木、ツォは上におくとの意味、練木は犁の上に置くからだという村人の説明)、くびきはNgyakshing(ニャクシン:ニャは牛の、シンは木)という(写真3)。犁先がユニークなのは、左右が写真のように右の片方に傾いた断面をしていることである(写真4)。これによって土を右側に反転させていくのだと考えられる。犁起こしの深さは、犁身に犁先を取り付ける時のクサビであるSap(サップ)

で行う。犁先を犁身につなぐクサビは、上部のクサビを Jung Sap (ジグ サップ、ジグは後ろという意味、サップはクサビ)、下部を Ka Sap (カ サップ、カは口という意味) という (写真4)。

田に犁をかけることを、Ung (ウング：耕地) Thoughou (タオウ) という。水田用の犁先 (長さ117cm) を Ri Uu Thongpa (リ：水、ウー：田、トングパ：犁先) という (写真5)。Ri Uu は水田のことである。畑用の犁先 (長さ88cm) を Pang Sa Thongpa (パング：平坦な、サ：土地、トングパ：犁) という (写真5)。Pang Sa は畑の土のこと。

水田と畑の一筆を Dom (ドム) という。

畑用の犁先 (写真5) を、50Rupee (インドルピー、1米ドル≒40ルピー [2008年3月6日現在] 以下 Rp) で、売ってもらって日本に持ち帰った。この犁先は現在88cmの長さであるが、もともとは100cmほどあった。2年間使ったものである。1～2日で犁先を交換する場合もある。

**まぐわと鎌**：砕土と均平用の道具は Muri (ムリ) という。木製で、梯子状をしていて、バングラデシュやアッサム州の Moi と似ているという。この Muri については、午後 Sangti 村を再訪して実測し、写真におさめた (写真6)。鎌は Tsadar (セダール、モンパ語で T はほとんど発音していないように聞こえる) という (写真7)。鋸鎌である。

**水田や畑の本田準備**：4月の5～6日に、水がつかない畑状態で、トウモロコシを栽培する畑に一度犁を入れる。6月～7月に水稻を栽培する田で、畑状態の田に一度犁をいれ、田に水を入れる。水は山からひく。犁おこしが終わったその日に田に水を入れる。犁で田をおこす時間は、朝の7時～8時から夕方の5時～5時30分くらいまでで、二頭の牛にひかせる。村全体で、10日間で水田の本田準備の犁入れが終わる。Pomaさんは一日で犁おこしを終える。Pomaさんの話では、ldom とは1日に犁でおこすことができる広さだという。それを単位としているというが、面積を Acre (エーカー：約40a、4反) で尋ねたが、Pomaさんには Acre が何かが理解されなかった。犁入れ後8～9日間、25cmの深さに田に水をはる。その後、梯子型まぐわである Muri を一日かけてかけ (この作業を Muri Fawien ムリ ファイエン という)、田植えをする。田植えは、7人の女性

で、ldom の面積を一日で終える。犁や梯子型まぐわをかけるのは男性の仕事である。田に水を入れることを Ri Tatpen (リー：水、タッペン：送る) という。田植え後、田に水を張り続ける。約一ヶ月後の7月に手取除草 (Ra Sha Prapeng、ラ：稲、シャ：土地、ブラング：美しくする) をする。肥料は施さない。収穫 (Ro Thok Khwein、ロ トック：穀粒、クウェイン：集める) の約一ヶ月前に水を田から落とす (Ri Shai Bang、リ：水、シャイ：外へ、バング：する)。

トウモロコシ (Pinang ピナグ) は、4月の5～6日の一日で耕起と播種と覆土を完了する。2頭の牛に犁をひかせ、犁溝にトウモロコシを点播種し、播種した溝と平行に犁をもう一度かけて覆土する。この播種の溝の犁かけを Ung Thaweing (ウング：耕地、タウエイグ：犁をかける) という。

**肥料**：覆土は、Phari Ah Laien (パリ：土をかける、ライエン：それをほかす) という。Dirang から国道を車で走り Tawang まで約40kmのところに Jang の街がある。山の斜面の標高3000mの枯れた竹が一面に生えていた道から、谷底をめがけて七曲の坂道をいっきに下ると標高2525m、N27° 24.209'、E91° 59.757' で Jang の街にでる。ここから街の中を走りさらに下っていくと、標高2230m、N27° 34.756'、E91° 58.405' あたりから道の両側に、移植され、出穂中のシコクビエの畑が多くなる。トウガラシの育つ畑ではブナ科のオーク (Oak) の木の落ち葉が施してあった。Monpa 族の人々は、牛糞や羊の糞の他に、オークの落ち葉を冬に集めて耕地にまいて堆肥とすることが知られている<sup>6)</sup>。しかし、Sangti 村では、他の Monpa 族の村のように、オークの落ち葉を堆肥としてトウモロコシの生育する畑には入れていない。窒素肥料として Liba (リバ：尿素) を播種2ヶ月後の6～7月に施肥する。ldom 当たり 22.5kg 施肥する。除草は、播種後10～15日後に大小の鋤である Koda (コダ) (写真8) もしくは Chau (チャウ) (写真9) を使って行う。1回目の除草の1ヶ月後に、2回目の除草を行う。その後トウモロコシの株元に (窒素肥料だと思われる：安藤の注) を施肥する。8月末から9月中頃にかけて収穫作業 Pinag Photpo (ピナグ：トウモロコシ、ポツペ：折る。トウモロコシの登熟した穂をへし折って集める) をする。この村では、米とトウモロコシを混ぜて食べる。大

麦、シコクビエと米を交換する。庭の隅には米の精米やトウモロコシの糲(ほしい)をつくるためにもちいる木臼のLu(ルー)と杵のNy Dong Tong(ニ ドン タング)が置いてあった(写真10)。

**トウモロコシご飯とトウモロコシはったい粉:** トウモロコシと米のまぜご飯をKharangpa(カラングパ)という。トウモロコシを粉にして練って煮たか、蒸した?(安藤の推測)ものをBope(ボッペ)という(オオムギでつくるはったい粉のようなものをトウモロコシでつくる)。以前、バングラデシュのドッキンチャムリ村で食べた大麦の携行食によく似ていた。9月14日の夜にボッペを食べたが、口には合わなかった。9月15日の夜にはカランパを食べた。在来の米は赤米でそれに碎かれたトウモロコシの粒を混ぜたKharanpaは、見た目には黄色のご飯となるが、十分に食べられるご飯だった。

**Dirang周辺のMonpa族の中での水田耕作をする村:** Monpaの中で、Sangti Pa(Sangtiは村の名前、Paはモンパ語で人、Sangti村の人という意味で、前述したようにモンパの人々は、村や地名をつけて、モンパ族の中に細かな分類をつくっている)、Lish Pa、Yewang Pa、Bhoot Monpa(Rahung Paとも言う)は、水田を耕作している。

**午後の調査:** 昼食を、Dirangの街のゲストハウスで食べた後、Sangti村の中心部に戻り、農具調査を継続する。特にMuriの写真と実測を目的としたが、3名の村人を中心に興味ある話を聴くことができた。写真5のMuriは15年前につくった。硬い材であるチュクの木(Chug Shing)が原材料である。地点は、標高1586m、N27° 24.144'、E92° 16.563'。午後、話を聴いた3名の男性はTashiさん72歳、Galongさん36歳、Dorjee Gyatsoさん33歳、である。

**アッサムから入った鋸鎌とチベット人鍛冶屋:** 鎌は前述したようにTsadar(セダール)という(写真7)。鋸歯であるセダールは、平坦な地方であるアッサムのUdulgri(ウドゥールグリ)、Tangla(タングラ)から20年前に、入った。ウドゥールグリ、タングラには、チベット=ビルマ語族系の民族であるBodoやRabaの人たちが住んでいる。セダールが入る以前は、鋸の歯のついていない鎌であ

るBariong(バリオン)が使われていた。これは、手斧であるChowang(チョワン)(写真11)とともに、チベット人の鍛冶屋がつくっていた。現在、チベット人の鍛冶屋はRaja Pa(ラジャ・パ)と呼ばれている。現在では、定住しているが、9~10年前までは、村から村へと移動して鍛冶屋の仕事をしていた。チベット人の鍛冶屋はセダールを作らない。セダールは、大抵は4年間ほどで使い捨てである。アッサムやバングラデシュのように、鍛冶屋が鋸の歯を研ぐことはしない。セダールは、Dirangの街の店から購入してきている。

**Sangti村の世帯数と人口:** Sangti村は約160世帯という。2006年度のWest Kameng Districtの統計表(2001年の人口センサス)によれば、人口764人(男性377人、女性387人)、世帯数170世帯とあり、聞き取りの数字と大きく異なる。いつものことであるが、インタビューに答えてくれる村人は、国はことなれども、大抵、自分たちの村のことを頭にいれている。地域に生きている証のようなものなのだろう。

**焼畑と世帯当たり所要耕地面積:** アッサムやバングラデシュで一般に焼畑のことをJhumというが、Sangti村では、Yaiuung(ヤウン)という。現在は、焼畑はSangti村では、3~4世帯であった。15年前までは、村の全世帯が焼畑をしていた。現在、村では、水田の所有は6~7dom/世帯~3dom/世帯で、トウモロコシもほぼ水田と同じ面積だという。3~4世帯の焼畑を行っている世帯は水田も所有していて、焼畑は、9~10dom/世帯の面積だそうだ。全世帯が焼畑をしていた頃は、4~5dom/世帯の焼畑を各世帯が行っていた。焼畑にはBrang(ブラング)と呼ばれる出小屋があった。焼畑は3年間作付けした後、10年間休閑して再びもとの焼畑をした土地に戻ってきた。

**焼畑耕作:** 1月~2月にかけて、斧のBengra(ベングラ)(写真12)と手斧のChowang(チョワン)(写真11)で木を切り倒す。3月に倒した木を乾燥させて、5月に火入れをする。6月に小さい鋤であるChau(チャウ)(写真9)で穴をあけてトウモロコシを点播した。ここでは植付け棒は使わない。焼畑では、トウモロコシの株間に、マメ、キュウリ、ユウガオ、カボチャなどを混作した。シコクビエも栽培されたが、シコクビエとトウモロコシは混作されない。焼畑でのトウモロコシの収穫は、9

月の終わりから10月の初め。焼畑適地は、遠方の山の上部で行う。麓の方は、土が肥えていないので焼畑は以前からやっていない。トウモロコシの収穫後の焼畑には牛を放つ。2年目と3年目は、トウモロコシなどの残渣を燃して、同じ農作業の手順を繰り返す。焼畑のみの耕作をしていた人もいたようで(安藤:注)、そういう人は、トウモロコシと米を交換していた。

**主食の変化と交換経済:** トウモロコシは、地酒や Bope (ポッペ) (写真13)、米と混ぜた Kranpa (クランパ) 飯 (写真14) として利用している。米とトウモロコシは、普通は1:1の比率で混ぜ合わせて炊かれる。米は、パーボイルド米ではない。赤っぽい米だという。食事は、朝食 (Namning Toshen ナムニング トシェン) 6:00~7:00、昼食 (弁当が多い、弁当 Iyenan イエナン) 11:00~11:30、夕食 (Nire Thoshen ニレ トシェン) 16:00~17:00の3回が現在一般的だそうだ。朝は、3:00頃に起き、男は牛と馬の世話をし、女は料理、昼は弁当を畑に持参することが多い。晩は19:00頃に寝る。現在は、平均1日に1回はトウモロコシ飯であるクランパを食べている。30年前はポッペとクランパを主に食べていた。50才以上の方は、ポッペとクランパの食事になれているが、50才以下の世帯は米を毎日食べることを好む。以前は、新年の祭りの時にのみ米を食べた。

米が15年前から政府の Ration Shop で買えるようになった。現在、1kgが、4Rp、8Rp、10Rpの3段階で購入できる。米の自家消費量の7割が自家生産で、残り3割が購入されている。米と交換するものは、トウガラシ、羊毛、トウモロコシ、ソバ、オオムギ、コムギ。交換する相手は、Tawangの遊牧を生業とするノーマッドである Bropa (プロバ) の人々である。焼畑は、高所で土を選んで行う。Rama Camp という集落から約6km、Dirangの街から徒歩で約4時間のところに位置する3000mの標高に住む、プロバの Monpa の人である Lubrongpa (ルブロングパ) とブータンの Saktangpa (サクタングパ) との間とでも交換を行う。ブータンの Saktang と Merak の地域の人々は、兄弟は一人の妻を娶るノーマッドの習慣があるという。

**稲の品種:** 15年前も今も米やトウモロコシは同じ在来種で、米は赤米だという。白米は蒸さずに

煮ている。品種名は、Sung Sung Bara (スン スン ボラ) という一品種のみ。米の収量は、6~700kg/dom。白米では350kg/dom。4dom = 1ha。1domは50m × 50mの広さだと、3名の男性は教えてくれた。Pomaさんの説明では、はっきりしなかったが、3名は面積で示してくれた。1domは0.25ha(2反)となり、牛や人力だけの農作業では、一日がかりの仕事の面積となるのも頷ける。トウモロコシの品種名はとりたててない。これも興味がある現象である。後の課題としたい。

**在家の僧:** Sangti村のGonpa(チベット仏教のお寺)はSangti Gonpaといい、100年以上前からある。坊さんはRama(ラマ)という。この村のRamaは、結婚できるRamaで、父から息子へと世襲するかのようになりRamaとなっている。Sangti GonpaにはRamaが40人いるが、すべて村人で、在家者である。

**その日の調査を終えて:** 9月14日のSangti村の調査を終えて、Dirangのゲストハウスに17:30に戻る。木製の犁先の無床犁を見て、今でもこのような犁が使われていることに驚いた。アッサムでは鉄(鍛鉄)の犁先を使った犁が使われている。アッサムとの交流が盛んなDirangで、鉄の犁先が使われていないのが不思議に思われた。この日の調査では、この質問をすることを忘れていたことと、聴き取りに時間が取られて、稲が育っている水田の畦をあるくことができなかったことが気がかりで、2007年9月16日の午前中にSangti村を再訪する。その際に36歳のGalongさんに、鉄の犁先をSangti村で使わない理由を尋ねると、鉄の犁先を使うアイディアが無いからだという。確かに、アイディアがない、ということもあるだろうが、鋸鎌はアッサムから入ってきているのであるから、犁が入ってもおかしくはなく、何か、理由があるのだろう。この疑問への一つのなっとくいく回答は、後述するように今回の調査の後半で訪問したTawangのKhirmu村での調査まで待たなければならなかった。

2007年9月15日曇り、一時小雨、West Kameng 県 (District)、Dirang 郡 (Circle)、Lish (リス) 村での調査

**Lish村に出発:** 7:24にゲストハウスを出発し、Dirangの街からTawang方面へのDirang川沿い

の国道を車で走り、7:35に目的地である Lish 村に到着した。集落の家は舗装道路を挟んで斜面に点在している。私は道路から下の村に入った。Lish は Lisu (Pasang さんに確認した英語表記) リスと聴こえる。しかし、統計表や村の英語をかける人は Lish と表記している。Lish 村の言葉は Monpa 族とは異なり、顔つきは、チベット=ビルマ語族の Bodo 族の人々に似るといふ。服装などは Monpa 族と同じ。Lish 村と Gonpache (ゴンパチェ) 村は言葉が同じで、Gonpache 村の人は、自分たちのことを Kispi (キスピ) と自称している。統計表では、Lish Gompache 村と表記されている。Lish 村の人々は、Gonpache 村と同じように、自分達を Lishpa (Lish 村の人) とは呼ばず、Kispi と自称している。調査したのは、Lish 村から新しく道沿いにできた人々がつくった Zinkha (ジンカ) 集落である。位置は、標高 1598m、N27° 22.977'、E92° 13.268'。Zinkha 集落で、村の入り口で出会い、犁などの農具を見せてもらえないかと声をかけて知り合いになった 21 歳になるクラス 10 の High School の男子学生である Leeki Thongkhar さんに村を案内してもらった。農具の名前や耕作方法などについては、集まってきた村の男性たち 9 名 (年齢は、40 歳、21 歳、21 歳、30 歳、21 歳、50 歳、22 歳、18 歳、22 歳) から話を聴いた。

**犁と農具：**犁先は木製、トウモロコシ畑用と水田用では犁先の大きさが異なっている。犁の形態は Sangti 村と同じである。写真 15 は、2 年間使用した犁先で、トウモロコシ畑用は長さ 47cm、水田用は 53cm である。トウモロコシ畑用は、Moshu Leg Far (モシュ：トウモロコシ、レグ：耕地、ファール：犁先) という。木製で、オークの木 (ヒンスー HingShu) を材料にしている。水田用は、Nishi Leg Far (ニシ：稲、レグ：耕地、ファール：犁先) という。やはりオークの木を材料としている。犁先の形は、ミャンマーのまぐわ (Tun) の歯と酷似している。犁のことを Lish 村の人は、Nang Gin (ナング ギン) という。詳しい各部の名称は写真 15 を参照のこと。Lish 村と Sangti 村では各部の名称が異なっているが形態はほぼ同じである。Lish 村では、トウモロコシ畑用と水田用の二つのまぐわを使っている。トウモロコシ畑用は、Moshu Leg Mari (モシュ レッグ マリ) と

いい、ヒンスーの木を使った梯子状のまぐわで、Sangti 村のまぐわと同じである (写真 16)。水田用は、Nishi Leg Mari (ニシ レッグ マリ) という。板をたてにしたような立板状まぐわで (写真 17)、水田を平らにするのに効率が良い用になっている。松の類である Bitchi (ビッチー) の木でつくる。犁やまぐわはくびきで 2 頭の牛に引かせる。くびきは Farging (ファルギン) と呼ばれ、Sangti 村と同型である (写真 18)。材は、ファルギンの木で、ハンノキの類の木のような。Lisu 村でも犁先を購入した。犁先は、木製で 3 年間ほどつかったもの。囲炉裏の上にかざしてあった。他にもう一つの 1 年間ほど使った犁先がかざしてあった。

この他の農具は、次のとおり。Hoda (ホダ) と呼ばれる手斧 (写真 19)。稲刈りと除草用の鎌である Balei (バリー) (写真 20)。鋸鎌の Tsadar (サダール) も使っている。小さい除草用の一本鋤である Chaku (チャク) (写真 21)。平鋤の Koda (コダ) (写真 22)。畑に入れるためにオークやマツの枯葉を集めるための熊手のような道具である Bakshing (バクシング) (マツの枝を火であぶってつくる) (写真 23)。男女共有の大きな竹籠である Paokpa (パオクパ) (写真 24)。小さい竹籠である Phosong (ポソング) (写真 25)。

**水田での犁を使った耕起方法：**6 月の第 1 週に畑状態で犁をかける。7 月の終わりから 8 月の第 1 週までに田に水を 25cm 位の深さに入れる。この作業を Kau Shida (カウ：水、シダ：施す) という。一週間ほど間を置いて、水田用のまぐわをかけ終わった箇所を女性が田植をする。水源は山の谷筋、筆は Gom (ゴム) という。面積の単位は Gangpu (ガングプ) 。面積の単位は、水田のみに適用されて、畑 (トウモロコシを主に栽培している) に適用されない。1gom は、1 時間で牛で犁で耕起できるくらいであり、1gangpu は 2 日で牛で犁によって耕起できる広さで、7gom だと Pasang さんが通訳してくれたが、数字が不釣合いで、単位の面積の値については、再度調査する必要がある。畑は、Leg (レグ) と呼ばれるのみで、面積の単位はなく、畑が売買される場合は、買い手と売り手が、売買される畑で話し合い、決定される。まぐわ (Mari) をかけることを Mari Songda (マリ ソングダ) という。1gom で 0.5 時間かかるという。田植を Nishi Haida (ニシ ハイダ) とい

う。女性労働力が中心であるが、男もする。犁起こしは、朝8時～午後6時くらいで、1日で、5～6gomの田を起こす（Gomは筆という意味に近く、小さい広さの耕地から広いものまであり、ここでGomは小さい広さのものであるという。大きなGomは1日で1gomしか除草できないという）。1gakuは2日間の犁起こしの時間が必要である。

**田植と除草、水管理：**田植は8月の第1週までに終え、一ヶ月後に手取り除草をする。除草のことをNishi Lubda（ニシ：稲、ルブダ：除草すること）という。女性一人で、1日で2～3gomの水田の除草ができる。水をためてある田をNishi Kau Kangda（ニシ：稲、カウ：水、カウング：溜める）という。畦をGom（ゴム）という。稲作では、田植後に毎日朝・夕に水田の水位をチェックしに行く。排水・用水用の畦の水口をKau Watang（カウ：水、ワタング：水の道）、水路をKau Kholo（カウ：水、コロ：水源）と呼ぶ。

**畑の耕起：**トウモロコシ畑での犁起こしは、朝10時～午後5時で、4月～5月の間に、2頭曳きの牛の牽引による畑の耕起後、種子を散播する。その後1度犁をかけ、畑用まぐわで覆土均平する。一連の作業は、1日で行なわれる。

**牛糞の利用と施肥：**Dong Data（ドング：つなぐ、ダタ：たもつ）という習慣がある。田、畑では犁起こしをする前の1週間ほど、夜は、牛（牛をSoiソイと呼ぶ）10～12頭の首に紐をつけて田や畑につないでおく。昼間は放つ。普段は山に放つ。牛糞を肥料にかえている。

施肥について、稲作で、耕起前に牛が山などについて、田につないで置くこと（Dong Data）が出来ない場合は、尿素的肥料を施す。肥料をHeba（ヘバ、牛糞もヘバという）という。田植の後、2～3日後に1gom当り尿素を1kg1回施す（小さなGom）。

トウモロコシは、播種の翌日にオークや、常緑樹の葉を施す。これをSumba Hukda（スンバ：葉、フクダ：施す）という。昔から特にトウモロコシの畑で行なっている（写真26）。施肥する場合は、2ヶ月後に、Chakuの鋤（写真21）で手取り除草した後に（シコクビエでは道具を使わずに手取り除草した後に）、恐らく、尿素を施肥するものと思われる。

#### 村の世帯の所有する牛の数と耕地面積、協同作業

Lish村は約120世帯で、4人のGam Bura（ガム プラ：村の世話役、リーダー）がいる。Lish村では、村をRunpa（ルンパ）という。調査をした道路沿いのZinkha集落は、はじめはLish村の中の集落で、12年前から道路沿いに家ができた。もともとのLish村の集落は道路から離れている。現在ではZinkha（ジンカ）集落は新しい名前の村として認知されている。Lish村120世帯の内、25世帯であるという。他に本の集落で村の名前となっているLish集落80世帯、Kiska集落15世帯の3つの集落からなっている。Lish村120世帯のうち、16世帯では、10～12頭の牛を所有している。Zinkha集落では4世帯が10～12頭の牛を所有している。上記以外は、世帯当り1～2頭の牛をもっているのが、2軒の家が牛を1頭づつ出し合い、犁起こしの作業をすることが多い。これをChuruba Wada（チュルバ：一緒に、ワダ：行く）という。

Lish村の1世帯当りの耕地所有規模は、もっとも広くて、水田16gom、畑（トウモロコシ）8～9gom、もっとも小さくて、水田4gom、畑3～4gom、平均して水田6～7gom、畑6～7gomだということ。Churuba Wadaは手間返しのことで、犁起こし、田植、除草、収穫などの農作業や他の仕事でも行なわれる。この他に、Lok Lida（ロック：手助け、リダ：する）という習慣がある。これは、3食と酒を振舞うことで、田植作業をしてもらう習慣で、稲作でのみ行なわれる。

**Lish村と婚姻関係が深い村：**Lish村の人々は、Chuk村、Gonpache村の人と結婚する。両方の村は稲作をしている。Gonpache村では、焼畑（Jhum）も行なわれている。焼畑のことを、Rik Dung（リク：耕地、ドゥング：森）という。

**9月下旬頃のLish村の生活：**朝4時～5時に起きる。朝食が7時～8時で、その後、薪取りに出かけ、10時頃に家に戻り、10時30分頃から11時頃まで畑もしくは田にでかける。実際に、村では、この時間帯に、薪取りにでかけている男女をよく見かけた。午後2時に畑や田で昼食、午後6時頃帰宅し、午後8時～9時に夕食を食べ、午後10時～11時に就寝する。今は電気があるが、電気が来ていなかった頃は、松の木をロウソクの代用として使っていた。

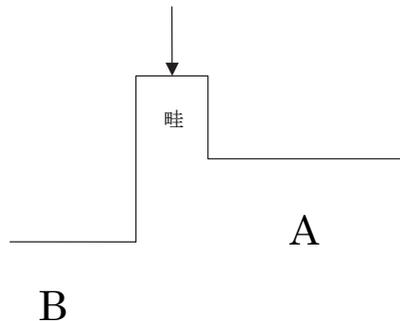
**食事：**炊かれた米を Hoi（ホイ）と呼ぶ。トウモロコシと米の混ぜご飯を、Lish 村でも Kranpa（クランパ）といい、混ぜる比率は重量比で、米：トウモロコシ = 4：1。Lish 村の人々は、トウモロコシの Bope（ボッペ）を Tuku（トゥク）という。Tuku は、現在は、田畑での昼食時に食べる。冬は火であぶって暖めて食べる。夏はそのまま食べる。21 歳の Leeki Thongkhar さんは、8 月と 9 月には朝はロティ（通常は小麦を練って焼いたパキスタンやインドのパン）、昼は米のご飯、夕方はトウモロコシと米の混ぜご飯であるクランパだという。他の月は 3 食とも米を食べるといふ。ただしこの若者の家は特例で、全体的に Kranpa を食べる人は少なくなっている。一般には、おじいさんは、一ヶ月間に 3 度 Kranpa を現在も食べている。この主食の変化は、15 年前に、道路が開通し、Dirang の街の Government Fare Price Shop（協同組合の店）で、米を配給（Ration）で手に入れることができるようになったことが大きいという。

**配給手帳：**Ration Card（配給手帳）は 2 種類が政府により発行されている（写真 27）。BPL（Below Poverty Line）の世帯は月に米を 10kg 購入でき、購入価格は、1kg 当り 7Rp と 4Rp の米を購入できる。APL（Above Poverty Line）の世帯では、最大月に 35kg まで 1kg 当り 10Rp で購入できる。見せてもらった APL の Card には、月に米 40kg、小麦粉 20kg、砂糖 3.5kg、塩（ヨード入り）2.5kg、灯油 5L を配給価格で購入できると記されてあった。

Lish 村 120 世帯のうち、7 割が、BPL と APL の両方の Card をもち、残り 3 割は、APL の Card のみをもっていた（2008 年 2 月の聞きとりでは全世帯が BPL と APL をもつようになったと村人は教えてくれた）。

**稲とトウモロコシの利用と品種：**Lish 村では、収穫のことを水稻では、Nishi Ramuda（ニシ：稲、ラムダ：刈る）という。トウモロコシは、Moshu Rada（モシュ：トウモロコシ、ラダ：折る）という。酒は Pha（パ）といい、トウモロコシから作る。稲の品種は、2 種の在来種と平地（アッサム地方）から入った 1 種類の外来種である。在来種は、籾は黄金色で、精米後の白米が赤い、赤米である Sung Sung Bara（スングスング：香り、バラ：大きい）と、籾は黒で、白米は赤い、黒米である Nishi Pang（ニシ：稲、パング：乾いた耕地）である。外来種は、籾は黄金色で白米は白い、Bicha Nishi（ビチャ：平坦地の人々、ニシ：稲）が栽培されている。外来種も在来種も昔から村にはあった。トウモロコシの品種は、粒が白い Moshu Yangkal（モシュ：トウモロコシ、ヤングカール：白い）、粒が黄色い Moshu Jung（モシュ：トウモロコシ、ジュング：黄色）。牛と馬にはトウモロコシを餌に与える。豚には、酒かすである Paja（パジャ）をやる。

**稲とトウモロコシの収穫：**稲の収穫は、11 月初旬～下旬にかけて行われる。12 月に、耕地で乾燥が行われ、たたいて脱穀される。12 月終わ



水田の所有は畦の中央で区分されている。畦の除草は、畦の中央から上段を A が行い、下段を B が行う。畦が崩れた時は、上段の田の所有者である A が修理する。

図 3 Lisu 村での畦の所有関係と畦の管理（安藤の調査 070915）

り～1月にかけて家に運ばれる。トウモロコシの収穫は、10月の終わりから11月に行われる。稲の収量は、粳で、1ganpu (7～8gom) 当たり5～6bag。1bag = 100kg。精米すると、半分の重量になる。トウモロコシの収量は、1ganpu 当たり25bag。

**教育:** Lish 村では、クラス10 (日本の高校1年生に相当する。クラス9を完了したもの) の人は10人。クラス10を合格した人は、2人。クラス11に在籍している人は2名。これ以上の学歴の人は村にはいない。

インドの学生は、クラス12を完了した人が、3年間の大学 (College) へ進む。大学院は修士課程は2年間、博士課程は3年間。

**川沿いに広がる田 (写真28) での見学と森際につくる畑苗代:** Lish 村の前に流れている川の名前は、Kho Dung という。(コ: 川、ドゥングが川の名前、Dirang 川とも呼ばれている)。田は、棚田となっていて、畦の所有と管理は以下の図3のとおりである。稲の苗代は、畑苗代でつくる。苗代のことを Li Hatang (リー ハタング) という。同じ苗代を3年間使う。畑苗代は、写真29のように、山の上の方に作る。9月に、木と草をきれいに拓き、苗代用の土地を平鋤である Koda で起す。この作業を Ose Yogda (オセ: 草、ヨゴダ: 耕す) という。3月に再び Koda で耕し、土を細かくする。化学肥料も堆肥も施さない。4月～5月に苗代に播種して、小さな鋤である Chaku で覆土する。7月に苗取と田植えが始まる。Li は苗のことで、本田の田植用の苗を Nishi Li (ニシ: 稲、リ: 苗) と呼ぶ。本田での尿素的施肥は、第一回目が田植の翌日もしくは翌々日。第二回目は一ヶ月から二ヶ月後で、3kg/gom (比較的広い gom の場合) である。施肥した時に、水口を一週間閉める。尿素的は20年以上前には村に入っていた。

#### 2007年9月16日晴れ、Sangti 村での稲田の観察

**水田の見学とトウモロコシの糲 (ほしい) つくり:** 午前9時35分から Sangti 村で、稲が育っている田を観察にでかけた。稲のことを Sangti 村では、Ra と呼ぶ。畦を Doli、水路を Li Nala (Li: 水) という。田はランダム植で、現在、出穂中であった。水口には名前がなく、石が置いてあった。石

は、恐らく、水が流れることによって畦が崩れるのを防ぐ目的があるのだろう。出穂後の稲は、草丈120cm、畦の幅は30cm～50cm、田の水の水深は5cm、畦の高さは10cm、水路は草で覆われていた。田の調査をした地点は、標高1578m、N27° 24.080'、E92° 16.647'。田は、川沿いに分布していたが、用水は川からではなく、村の集落の中を通ってきている谷川の支流から引いていた。支流には水車小屋が数個たてられていた。小屋の中には石臼と、粒をとった後のトウモロコシの芯が片すみに積れてあったのを2008年2月の補足調査で見かけた。トウモロコシの粉ひきに使われているようだった。本流の川の名前は、Sangti Chu (サングティ・チュ) と呼ばれている。この日は晴天で、Sangti 村の集落では、収穫したトウモロコシの粒を熱した砂にいれて、焼き、それを杵でついて、トウモロコシの粒の糲 (ほしい) のようなものをつくっていた (写真30)。一口もらったが、暖かいうちは十分に美味しかった。

#### 2007年9月17日晴れ、Tawang 県 (Disitric)、Tawang 郡 (Circle) の Khirmu 村での調査

**Tawang への移動:** 2007年9月16日に、Tawang 県でも犁を使っている村があると聞いていたので、その村を道々尋ねながら Tawang に車で移動した。途中標高4104m、N27° 30.319'、E92° 06.269' の Sela Pass の峠を越えた。峠のあたりは、2007年7月末に通った時には、お花畑であった。霧が濃く、この日も霧と小雨であった。標高3823m、N27° 30.980'、E92° 04.899' のあたりに下ると、ヤクが放牧されていた (写真31)。さらに道を下ると、前述したように標高2525m、N27° 24.209'、E91° 59.757' 辺りで Jang の街が七曲の道路沿いに広がり、Tawang の街まで40kmの道標がでてくる。この辺りで、シコクビエの登熟中の畑が目立つようになった。Jang の街から谷底に降り、Tawang 川 (?) を渡り、道は再び登りとなる。Tawang まで23kmの道標の近くで、道路で、収穫後のシコクビエやトウモロコシの調整作業をしていた人々に車を止めて犁を使っている村の話を聞いた。車を止めたのは Luho 村であり、シコクビエのことを Kongpo (コングポ) という。稲を Koh (コー)、米を Dap (ダブ) という。この村はすでに Tawang Monpa の村で、使ってい

る単語が異なっている。Luho 村では米は栽培していない。犁を使っているのは、隣村の Khirmu 村であると教えられた。Tawang まで 25km の道標の地点は、標高 2249m、N27° 34.321'、E91° 56.133' であった。Luho 村からはさらに Tawang までは登りの道となる。ハハコグサに似た雑草の花一面に咲いている丘の斜面を通して Tawang の街に入った。Tawang の街にあるチベット仏教の寺（Tawang Gonpa）は、標高 2885m、N27° 35.178'、E91° 51.425' であった。

**Khirmu 村へ向う：**翌日、Tawang から 18km の道標の地点で Khirmu 村に戻り、道路の山側の集落に入った。午前 8 時 30 分に村での調査を始める。道標の地点は、標高 2428m、N27° 34.244' E91° 55.374' であった。道標から入った家近くで、犁のことを尋ねたことがきっかけで、この日の耕地での聞き取りと観察、その後の Shino 村までの調査につきあっていただけた方は、Khirmu 村の農民の Karma Wangchu（カルマ ワンチュ）さん男性 41 歳である。犁で畑を耕していたのは、畑の所有者である Lobsang Wangchu（ロクソン ワンチュ）さん（男性 30 歳）だ。聞き取りは、主に二人から行った。

**オオムギ畑での犁での耕起：**Khirmu 村では、オオムギとシコクビエを別々の畑でつくっている。トウモロコシの栽培は少ない。現在は、オオムギの本田準備の最中であるという。犁を使って本田準備中の畑に連れて行ってもらい作業を観察した。犁で耕していた畑の位置は、標高 2483m、N27° 34.380'、E91° 55.076'。私が調査したことのある中国雲南省紅河県甲寅郷の棚田地帯では、この標高では畑をつくっていなかったと思う。畑は南向の谷の南斜面に位置しているから恐らくオオムギを栽培することができるのだろう。

畑にいくと、6 人（男性 4 名、女性 2 名、男性の一人は畑の所有者で、犁の所有者でもある。女性 2 名は、一人は手伝いであった）が犁起しの後で鋤で均し、2 人が犁である Thongpa（トングパ）をあやつっていた（写真 32）。大型の犁である。1 人はくびきである Niyashan（ニヤシャン）をもって、2 頭の牛を制御していた（写真 33）。鋤で起している人は、日雇い農夫で、本田準備作業をしている今日は、朝 7 時から午後 4 時まで働き、朝、昼、夕方の 3 食の提供を受けて一日 60Rp の賃金

をもらっている。牛は、ミトン（牛の一種）と牛をかけあわせたもので、くびきをもっている人の所有である。牛の借り賃は、牛一頭で一日 70Rp なので二頭であるから 140Rp となる。犁を制御する人は、一日 70Rp の賃金である。播種作業では、食事は、朝 1 食、昼 2 食、夕方の 1 食の 4 食が雇用主より提供される。犁おこしの特徴は、木製の大きな犁先で起した大きな土の畝のような塊を鋤で砕くことだ。鋤は Pala（パラ）とよばれ、Dirang 辺りで Koda もしくは Kodaro と呼ばれているものと同じである（写真 40 参照）。犁起しの後をおっかけるように鋤でならず作業が行われている（写真 34）。

犁でおこすことを Rama Chekshi（ラマ チェクシ）といい、鋤である Pala でおこすことを Lenga Koda（レンガ：耕地、コダ：耕す）という。犁と鋤で耕していく作業を Rama Chekan（ラマ チェカン）という。この畑は、雨季に休閑して夏に 1 作つくるのみ。今からオオムギの Gefu（ゲフ：これは Dirang Monpa 語）を栽培する。Tawang Monpa 語ではオオムギを Nai（ナイ）という。オオムギから、はったい粉である Zan（ザン、Tawang Monpa 語、Dirang Monpa 語では Bope という）や酒である Chang（チャン、Tawang Monpa 語、どぶろく）をつくる。

**オオムギの栽培方法：**本田準備の犁入れは、7 月下旬に一度行う。9 月下旬に 2 回目の犁おこしを、10 月のはじめに、3 回目の犁おこしをして、犁溝に種をまき、鋤である Pala で大きな土の塊を砕きながら覆土していく。種播の 3 日前に尿素をまく。Kechan（ケチャン）の木（常緑樹でオークの仲間）の落ち葉で、播種の 1 ヶ月後に畑をマルチする。ケチャンの木は、畑の隅に植えられていた。播種作業を Nai Zyu Potto（ナイ：オオムギ、ユー：種子、ポット：播く）という。6 月頃に収穫する。収穫を Nai Thudo（ナイ：オオムギ、トゥド：刈る）。この日に犁で耕していた耕地には、オオムギのみ栽培する。

この村では、犁のみを使い、まぐわは使っていない。犁の後に鋤でならずので、まぐわは必要ないのだろう。

**犁：**犁は Thongpa、犁先は Thongpo（トングポ）という。練木を Chui（チュイ）という。すべて木製であり、練木は Magre（マグレ）という名の木

からつくるが、それ以外は、Kechan（常緑のオークの類の木）からつくる。くびきを Nyasheng（ニアシエング）という。くびきは、Kualishang という名の木からつくる。くびきと練木をつなぐ輪の紐を Ondi（オンディ）という。Ondi は竹の皮からつくる。Ondi は、平坦な畑では、中央に置かれるが、傾斜がある時は、牛のバランスを考えて谷と山側のどちらかに動かす。1962年のインド・中国の紛争以前から犁はあった。大工である Pon（ボン）が犁、まぐわを作る。案内をしてくれた村人の家で犁先を見かけたが、犁先は農家が自分でつくっているようである。犁は Dirang の Sangti 村や Lish 村でみたものよりも一回りは大きい（写真 32）（2008年2月の補足調査時には、案内をしてくれた Karma Wangchu さんの家の囲炉裏の上には9本の犁先が置かれていた）。

畑での調査を終えた後、Karma Wangchu さんの家で、トウモロコシの糲（ほしい）のようなものとミルク紅茶（チャイ）をご馳走になりながら聴き取りを続けていた。案内をしてくれた41歳の男性である Karma Wangchu さんは、12歳から農業をしている。Khirmu 村には大工は15～20世帯いて、大工は農業のかたてまに行っているという。Karma Wangchu さんはアッサムの犁を知っていた。アッサムの犁は片手で制御するが、Khirmu 村の犁は、大きく、両手で制御しなければならないが、早く耕すことができるので、Khirmu 村の犁がすぐれていると話してくれた。2日間で犁先をほかすという。Karma Wangchu さんは、1年間で犁先を12個使うと言っていた。

**シコクビエの栽培：**シコクビエを Tawang Monpa は、Kongpu（コングプ）という。畑のことを Na Leng（ナレン）という。水田を Nu Leng（ヌレン）というが、この村には水田はない。1～2月に第一回目の犁おこしをする。3月に第二回目の犁おこしをする。4～5月に第三回目の犁おこしをして、シコクビエを移植する。第一回目の犁耕の時に畑の片隅に苗をつくるために播種する。播種する場所には特別な名前はない。シコクビエの苗を Kongpu Nima（コンプーニマ）という。移植作業のことを Kongpu Kesu（コンプー：シコクビエ、ケス＝移植）という。収穫のことを Kongpu Krang（コンプー：シコクビエ、クラング：収穫後のシコクビエの穂のこと）という。オーク

などの木の落葉の枯葉と牛糞は移植2ヶ月後に施される。牛は、村から25kmほど離れた山の中に、小屋をつくって飼っている。そこから牛糞を運んでくるのだそうだ。

**村の社会と生活：**Khirmu 村は175世帯。50～75世帯が、Tawang や Arunachal Pradesh 州の州都 Itanagar に働きにでている兼業農家である。多くは政府関係の職についている。耕地は売買しない。相続が発生した場合、村の顔役である Gam Bura（ガンブラ）が来て仲介し、均等に相続させる。子供の中で、僧籍に入った者、女性には相続権はない。

41歳の Karma Wangchu さんの家族の1日の生活の時間割はつぎのようだと教えてくれた。妻33歳、長男10歳、次男8歳、長女1歳。長男は、Tawang の両親の家に住まわせてもらって、政府の中等学校に通っている。妻の実家は8kmはなれた隣村の Bondir である。Karma Wangchu さんはオオムギとシコクビエを栽培している。この村から7km、谷を下ると、稲をつくっている Shino 村があり、そこから米を購入している。オオムギを1クインテル（Quintal：100kg）あたり800～850Rp で売って、シコクビエと米を1クインテルあたり700Rp 見当で購入する。Shino の村と婚姻関係をむすぶことが多い。

3:00～3:30 起床。妻は軍の駐屯地で家事の仕事にでかける。

6:00 妻が帰り、朝食を取る。朝食ははったい粉である Zan（ザン、Dirang Monpa が Bope と呼んでいるもの）。この村では Zan は主にシコクビエからつくる（2008年2月の補足調査で、オオムギを、主にチベット仏教の儀式に粉を加工してつくり物にしたり、粒を供物としてもちいているのを観察し聞き取った）。

7:00 畑にでかける。

13:00～14:00 昼食。牛乳からつくった Churi（チュウリ）をおかずの Zan を食べる。

19:00 夕食。米のみを食べる。夕食のみ米を食べる。他の穀物などは混ぜ飯はしない。

19:30～20:00 就寝する。酒の Chang（チャン）は、毎食後に飲む。

「食べてください」を、Tawang Monpa 語で、Topche Zo（トプチェ：食物、ゾ：食べる）。中国雲南省のチベット＝ビルマ語族の民族であるハニ

族は、食べてください、を、ドウゾと発音する。似ていると直感的に思った。食事をしましたか？は、Topche Zo Sowa (トプチェ ズ ソワ) という。チベット=ビルマ語族とチベット語は似たところがあるのだろう。

**女性のかぶりものなど：**小さな農具と生活具をお茶の後で見せてもらった。Tawang Monpa の女性は帽子をよくかぶっている。帽子は Nga Ma Jum (ンガ：ヤク、マ：の、ジェム：毛) という名前である (写真 35)。くつは、羊の毛と牛の皮でつくる (2008 年 2 月の補足調査で、男性がこの帽子をかぶっている姿も数件見ることができた。女性だけではないようだ)。服は、Monpa Lhan (モンパ ラン=モンパのドレス) で、上着と、ズボンと靴がセットになり、Shinka (シンカ) とよばれる。上着のみは Kyan Shen (ケン チェン) という。

**小さな農具：**Yangla (ヤングラ) 鋤 (写真 36)。オオムギとシコクビエの手取り除草に使う。草を Ne (ネ) といい、除草を Ne Shekosum (ネ ショコスム) という。オオムギ栽培では、播種 2 ヶ月後に第一回目の除草を、その 1 ヶ月後に第二回目の除草を Yangla 鋤を使って行なう。シコクビエでは、播種後 1 ヶ月後に Yangla 鋤で、その 1 ヶ月後に熊手のような Brikshiling (ブリクシリング) を使う。Brikshiling がシコクビエで使えるのは、シコクビエは、条播するからだそう。オオムギとシコクビエの播種での覆土には Kota (コタ) 鋤が使われる (写真 37)。Brikshiling (ブリクシリング) はこの家では金属性であった (写真 38)。草刈用には Ngazar (ンガザール) 鎌 (写真 39) が使われる。Luhu 村では Ngazar でシコクビエが穂刈されているのを見た (写真 52 を参照)。柄には Kechan の木が固いので好まれる。Pala 鋤 (写真 40) は 2 種類、耕起のために使う。Gila 山刀 (ギラ) (写真 41) はアッサムやバングラデシュでダオと呼ばれているものと同じで、草丈の高い草を刈る。Khyop (キョップ) 山刀 (写真 42) は、万能で何にでも使われる。Shrap (シラップ) 収穫棒 (写真 43) は竹製の棒を折り曲げて穂をこぐ様にしてオオムギの収穫に使うという。シコクビエは穂のみを鎌で刈る (写真 52 を参照)。Shopsa (ソブサ) 竹籠 (写真 44) はオオムギの収穫に使う。Mejong (メジョン) 竹籠 (写真 44) は収穫した大麦を運ぶのに

用いる。

**谷底へと標高別に連続する Monpa の村々：**南に向いた谷の尾根沿いに、下記の村が順に、上から、下に尾根上に開かれている。午後 12:42 に Khirmu 村を出発して Shino (シノ) 村に向かった。

Khirmu (キルム) 村 村の入り口の国道上で、標高 2428m、N27° 34.244'、E91° 55.374' に位置している。オオムギとシコクビエを栽培しているが、シコクビエの栽培は少ない。二毛作はしない。Khirmu 村から上は冷涼な気候だとみなされている。

Khraling (クラソング) 村 (道路の直下の村) シコクビエを主に栽培している。イネ、オオムギの栽培は大変すくない。

Boxari (ボクサリ) 村 シコクビエ、イネ、オオムギの順で栽培面積が多く、イネ-オオムギの二毛作もある。

Kipi (キピ) 村 昼食に立ち寄る。標高 2243m、N27° 34.317'、E91° 54.108' であった。この村から Shino (シノ) 村までは、イネ、シコクビエが主に栽培され、オオムギの栽培は少なくなる。14:05 に最初に生育中の稲の棚田に出会う (写真 45)。その地点は標高 2217m、N27° 34.270'、E91° 54.018' であった。1 ヶ月後に収穫の予定。6 月に田植をした。田は南向きにひらかれている。用水は谷から引いてあった。大きなヨモギが両道に生え、ハンノキに似た木の林を抜けると Shino (シノ) の村に 14:20 に到着した。Batum (バツン) 村、Thyngar (テンガル) 村、Shangar (シャンガル) 村は道沿いではなく Shino 村に到着した。

Shino (シノ) 村 稲の生育する棚田はすべて南向き (写真 46)。村の位置は標高 2054m、N27° 33.885'、E91° 54.370'。道路から Kipi 村まで 5km、Kipi 村から Shino 村まで 3km。Shino 村では、犁を一つ発見できたが犁先はついていなかった。まぐわを見ることはできなかった。Khirmu 村では、水田用のまぐわを Shino 村では使っているという話を聞いたが確認することはできなかった。Shino 村では、粳の精米には木臼ではなく、石臼を使い木の杵をつかっていた (写真 47)。Shino 村の下には、Kardung (カルドゥング) 村と温泉がある Grangar (グランガル) もしくは Ghenkar (ゲンカル) 村がある。Khimur 村から Shino 村までは、

標高差約 500m であった。この標高差がつくる気温などの微気象が二つの村の作付体系の違いを決定的なものにしてている。

ステーション・ワゴン車が土の道路の側溝に脱輪した。16:04 に国道に戻り、17:00 に Tawang の街に帰り、この日の調査を終了した。Khirmu 村と Shino 村とが経済的にもどこかでつながっているように、谷底に向かってつらなる村々は一つの農業生態系でつながっている。オオムギ、シコクビエ、イネなど穀物栽培は標高によってことなり、恐らく暮らしぶりも微妙に違っているだろう。高所の農業生態系を知る上では格好のフィールドであるという思いがした。

### 2007 年 9 月 18 日、快晴、Tawang Gonpa (タワン寺) での犁の絵とシコクビエの収穫調査

**六道輪廻図の犁:** 2007 年 9 月 18 日、朝 8:50、快晴 Tawang Gonpa (タワン寺) の見学に出かける (写真 48)。Tawang Gonpa は南東に向いている。寺の位置は標高 2885m、N27° 35.178'、E91° 51.425'。寺は Tawang では一番高いところに位置した大きな建物で、Khirmu 村、Shino 村の谷や Tawang の街を南東に見下ろすように建っている。写真 49 は、寺からの風景。寺の本堂の入り口の両側には壁絵がある。寺は 350 年前に建てられ、1997 年に壁絵は新しく塗りなおされたというが、デザインはもとのままだとお坊さんが教えてくれた。入り口に向かって右手の壁に、Samsara (輪廻) あるは The Wheel of Life と英訳される絵があった。高野山大学の奥山直司さんから、この絵は、チベット仏教では六道輪廻図と呼ばれているものであることを知る (写真 50)。その絵の中に、犁の絵があった。2 頭の牛で引いた無床犁の犁である (写真 51)。私は、チベット仏教やミャンマーのバガンの古代の寺院の壁画、パゴダの基壇部の浮彫、インドネシアのボルブドゥール遺跡やカンボジアのクメール遺跡の浮彫、クメールやバングラデシュのパララ王朝時代のヒンズー教のパララマ神の像に、描かれた犁のデザインを収集して比較しているが、それぞれ、時代と場所によって犁の形がことなり、南アジアから東南アジアにかけての犁の伝播とそれをもとにした当時の農業技術を類推する実証的な手がかりとなっている<sup>9,10</sup>。Tawang Gonpa の六道輪廻図に描かれている犁は、

両手で犁を握っているところや、犁身から犁床がほぼ真っ直ぐな形状をしているところかも、現在使われている私が観察した無床犁とよく似たものであると判断してよいだろう。17 世紀にも、ほぼ現在の犁が使われていたことを示している。本報告では言及するだけにとどめるが、私がチベットのラサ周辺で観察している犁や、チベット仏画に描かれている犁は、犁床のある犁であり、犁先は鉄である。ヒマラヤの南北では犁の系譜がことなることが推察される。チベットの犁と農具については、稿をあらためて報告したい。

**シコクビエの収穫風景:** Tawang 寺の見学を終えて、この日の宿泊地である Bomdila へ向かった。途中、Luhó 村でシコクビエを鎌で穂刈りしている収穫風景 (写真 52)、収穫したシコクビエを道路に日干して車で脱穀し、風選している姿 (写真 53) を見かけた。Bomdila から、その後アルナチャールプラデシュ州の州都である Itanagar、そしてアッサム州へと調査旅行を続けた。

### 謝辞

調査の準備を全面的に支援してくれた、旅行会社 Himalayan Holidays の Wange さん、通訳の Pasang さん、現地の調査の準備に聴き取りにいやな顔一つせず応じていただいた Monpa 族の村人の方々々に記して感謝致します。本報告は、科研費：萌芽研究「環ヒマラヤ地域と日本における農具収集と住民参加型資料館ネットワーク形成」(代表：安藤和雄、京都大学東南アジア研究所)、科研費：基盤 (A)「ブラマプトラ川流域における農業生態系と開発—持続的発展の可能性—」(代表：安藤和雄、同上)、総合地球環境学研究所プロジェクト「人の生老病死と高所環境—3 大「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応」(代表：奥宮清人、総合地球環境学研究所)の研究活動の一環で実施した調査に基づいています。以上、記して感謝します。

### 参考文献

- 1) 田畑久夫、金丸良子、新免 康、松岡正子、索 文清、C. ダニエルズ 2004 (2001)『中国少数民族事典』東京堂出版、p112, 124, 125, 126, 127, 119.
- 2) 応地利明 1987「犁の系譜と稲作」『稲のアジ

- ア史1 アジア稲作文化の生態基盤—技術とエコロジー—』(渡部忠世ほか 編) 小学館: 167-212.
- 3) 中尾佐助 1980 (1971) 『秘境ブータン』 教養文庫
  - 4) Fürer-Haidendorf, C.Von., 1982 Highlanders of Arunachal Pradesh, Vikas Publishing House, New Delhi, 1982. pp153-155.
  - 5) Dutta,D.K. 1996 The Monpas of Kalaktang, The Director of Research, Government of Arunachal Pradesh. p3
  - 6) Government of Arunachal Pradesh 1996 Gazetteer of India Arunachal Pradesh East Kameng West Kameng and Tawang, Gazetteers Department, Government of Arunachal Pradesh, Shillong. pp127-155, 1, 145.
  - 7) Government of West Kameng District 2006 West Kameng District at a Glance 2006 Arunachal Pradesh, District Statistical Office, West Kameng District, Bomdila: pp98, 99.
  - 8) Barkthakur, J.K. 1972 Census of Inida 1971 Arunachal Pradesh Part X District Census Handbook Kameng District, Director of Census Operations, Arunachal Pradesh, Shillong-3. pp16-21.
  - 9) 安藤和雄、Khin Lay Swe, Mynint Thein 2006 「ミャンマー・バガンのまぐわ (Tun) 農法に関する研究ノート—在地的展開と歴史的視座」 熱帯農業 50 Extra issue 2 (別号 2):49-50.
  - 10) 安藤和雄 . 2007. 「インドネシアとカンボジアの古代遺跡の犁の浮彫に関する調査ノート」 『熱帯農業』 51 (別号 1):93-94.



写真1 Sangti 村で収穫したトウモロコシを木組みの「はざ」にかける (安藤撮影 070914)



写真2 Sangti 村で観察した犁 (Tongpa) の全体 (安藤撮影 070914)



写真3 Sangti 村の犁の部分名称 (安藤撮影 070914)



写真4 Sangti 村で家の壁にかかると犁の練木、犁身 (安藤撮影 070914)



写真5 Sangti 村の水田用犁先と畑用犁先 (安藤撮影 070914)



写真6 Sangti 村の梯子型まぐわ (Muri) (安藤撮影 070914)



写真7 Sangti 村の鋸鎌 (Tsadar) (安藤撮影 070914)



写真8 Sangti 村の平鎌 (Koda) (安藤撮影 070914)



写真9 Sangti 村の小さい鎌 (Chau) (安藤撮影 070914)



写真10 Sangti 村の木の臼 (Lu) と杵 (Ny Dong Tong) (安藤撮影 070914)



写真11 Sangti 村の手斧 (Chowang) (安藤撮影 070914)



写真12 Sangti 村の斧 (Bengra) (安藤撮影 070914)



写真 13 Dirang のゲストハウスで食べたトウモロコシの Bope (上の左の皿、右は葉菜のスープ) (安藤撮影 070914)



写真 14 Dirang のゲストハウスで食べたトウモロコシ飯の Kranpa (安藤撮影 070915)



写真 15 Lish 村の犁 (Nang Gin) と水田と畑用の二つ犁先 (Far) (安藤撮影 070915)



写真 17 Lish 村の水田用立板状まぐわ (Nishi Leg Mari) (安藤撮影 070915)



写真 16 Lish 村の畑 (トウモロコシ) 用梯子型まぐわ (Moshu Leg Mari) (安藤撮影 070915)



写真 18 Lish 村のくびき (Farging) (安藤撮影 070915)



写真 19 Lish 村の手斧 (Hoda) (安藤撮影 070915)



写真 20 Lish 村の稲刈りと草刈り用鎌 (Balei) (安藤撮影 070915)



写真 21 Lish 村の除草用の小さな鍬 (Chaku) (安藤撮影 070915)



写真 22 Lish 村の平鍬 (Koda) (安藤撮影 070915)



写真 23 Lish 村の熊手のような道具 (Bakshing) (安藤撮影 070915)



写真 24 Lish 村の竹籠 (大) (Paokpa) (安藤撮影 070915)



写真 25 Lish 村の竹籠 (小) (Phosong) (安藤撮影 070915)



写真 26 Lish 村のトウモロコシ畑に施された落葉 (Sumba Hukda) (安藤撮影 07915)

モンパ族の犁農耕と農具に関する見聞記（安藤和雄）



写真 27 Lish 村で見せてもらった配給手帳（安藤撮影 070915）



写真 28 Lish 村の川沿いに広がる水田（安藤撮影 070721）



写真 29 Lish 村の畑苗代の跡地とトウモロコシ畑（安藤撮影 070915）



写真 30 Sangti 村でトウモロコシの糯づくり（安藤撮影 070916）



写真 31 Sela 峠を越えた 3823m の標高でみたヤク（安藤撮影 070916）



写真 32 Khimu 村の犁（安藤撮影 070917）



写真 33 Khimu 村の犁は二人がかりで起す (安藤撮影 070917)



写真 34 Khimu 村の犁おこしにつく鋤おこし (安藤撮影 070917)



写真 35 Khimu 村で、ヤクの毛でつくった帽子をかぶる女性 (安藤撮影 070917)



写真 36 Khimu 村の手取除草用の小さい鋤 (Yangla) (安藤撮影 070917)



写真 37 Khimu 村のオオムギとシコクビエの播種の覆土用鋤 (Kota) (安藤撮影 070917)



写真 38 Khirmu 村の金属熊手 (Brikshiling) (安藤撮影 070917)



写真 39 Khirmu 村の草刈用鎌 (Ngazar) (安藤撮影 070917)



写真 40 Khirmu 村の耕起用の 2 種類の平鍬 (Pala) (安藤撮影 070917)



写真 41 Khirmu 村の草刈用の山刀 (Gila) (安藤撮影 070917)



写真 42 Khirmu 村の万能山刀 (Khyop) (安藤撮影 070917)



写真 43 Khirmu 村のオオムギ収穫用の竹棒 (Sharp) (安藤撮影 070917)



写真 44 Khirmu 村のオオムギの収穫時に使う竹籠 (Shopsa) と運搬用の竹籠 (Mejong) (安藤撮影 070917)



写真 45 Shino 村までの下りの道、Kipi 村で初めて出てきた棚田 (安藤撮影 070917)



写真 46 Shino 村の棚田 (安藤撮影 070917)



写真 47 Shino 村の石臼と杵 (安藤撮影 070917)



写真 48 Tawang 寺 (Tawang Gonpa)、チベット仏教のお寺、南東向きに建っている (安藤撮影 070918)



写真 49 Tawang 寺から Tawang の街や Khirmu 村がある南東の風景（安藤撮影 070918）



写真 50 Tawang 寺にあるチベット仏教の六道輪廻図の壁画（安藤撮影 070918）



写真 51 六道輪廻図の中にでてくる犁の絵（安藤撮影 070918）



写真 52 Luho 村でみかけたシコクビエの鎌での穂刈（安藤撮影 070918）



写真 53 Luho 村でみかけたシコクビエの風選作業（安藤 070918）

## Summary

### Records of Listening and Looking about Ploughing Farming and Agricultural Tools of Monpas: West Kameng District and Tawang District in Arunachal Pradesh, India from September 14 to 18, 2007

Kazuo Ando

Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Monpas have settled at the high altitude places in the southern part of Himalaya since long years ago, most probably, parting from Tibetans settling in the northern part of Himalaya. They have, however, participated in receiving and creating the Tibetan Culture and living in the Tibetan Cultural Zone with Tibetans. Why did they part and leave for “South” and “North”; much different environmental situation? Why are they remaining at the high altitude places? How could they adapt themselves to the given environment? Monpas and Tibetans are still enjoying the world of Locally Existing (Zaichi), which Japanese have left such a world since the time of rapid economic growth period. The comparative study on the agricultural system of Monpas and Tibetans can again show us the importance of living in the world of Locally Existing. The author believes that it is an essential consciousness and concept to solve the global environment problems. For this purpose, the author has started the agro-ecosystem and farming system studies on Monpas and Tibetans. Particularly, the author got the chance to visit the Monpas villages in West Kameng District and Tawang District, Arunachal Pradesh from September 14 to 18, 2007.

It is also noticeable that possibly the academic information on plough and other farming tools of Monpas have been not published with photographs or figures. Monpas' plough is totally made with wood, including the plough share. The figure of the plough is unique according to the author's field work experiences in South and Southeast Asian countries including Tibet and Yunnan. Therefore, this report aims to provide the records of the listening from the villagers and looking in Monpas villages by the author's filed note and photographs for the scholars and visitors, particularly, the colleagues of the “High Altitude Civilization Study Programme” .